第二十一回　齋藤茂吉短歌文学賞

伊藤　一彦　『月の夜声』

本阿弥書店

選考委員
委員長　岡井　隆
委　員　小池　光
三枝昂之
馬場あき子
（五十音順）

【贈呈式】
平成二十二年　五月十六日（日）

伊藤一彦　『月の夜声』　（自選）

墓石と竹藪照らししづかなり月を離れし月の光は

きさらぎの月の光の網にては掬ひ得ぬ大き猫のなきがら

六十三のわれは六十二の墓標もつ明（あか）き月夜は一つ一つ見ゆ

山形の黒川の能、福岡の黒土（くろつち）の神楽　「黒」は時もつ

三割がPTSD（イラク戦争。）といふ帰還兵　残る七割の「正常」思ふ

バス停に忘れしカバン取りに行けばわれを忘れて静けきカバン

雨に負け風に負けつつ生きてゐる柔らかき草ひとを坐らす

冷凍庫の中に這入りて死にゐたる微小の虫の表情見えず

真夜中にふいに覚めたる瞬間は生れたての子のごとしよ心は

秋の陽が明るし昨日轢かれたる青大将の異形なき道

●選考委員による選評

『月の夜声』の受賞を喜ぶ

岡井　隆

歌壇の綜合誌に一年間連載された作品を編集したものでありますが、そのためもあって、従来の伊藤一彦の作品から一歩も二歩も踏み出しているところがあり、新鮮でした。もともと技巧のしっかりと働いた作風でありますが、一首一首が丁寧に作られています。一、二例示しますと

鶴唳をききしと思ふこの近くゐるはずなきか
ききしと思ふ

八千羽のアウシュビッツの生じたりわが大学の
二キロ南に

死なせたる責任言はず死悲しむ言ひ方を人は巧み
に使ふ

よい歌集が受賞されたことを喜び、著者の今後の活躍に期待します。

存在の影

小池　光

伊藤一彦氏は学生時代から今日までたゆみない作歌活動を重ねてきた。郷里宮崎にあって濃厚なる風土性を土台とし、教育者として、また高齢の人々への援助者として、人間性への深い信頼の上に立つ誠実で重厚な作風をつらぬいてきた。本集はその十一番目の歌集である。これまでの作風を継承しつつ、一方で野放図で、大胆な投げ出すような歌が点在し、またあたらしい境地を予感させるものとして収穫の一冊となった

しらじらと乾ける土に大蚯蚓（かんたろ）の身をまげ跳ねて死ぬ
しかあらず

六十三のわれは六十二の墓標もつ明き月夜は一つ一
つ見ゆ

無くなれる世にはなつかし太宰言ひし諸悪のもとの
「家庭の幸福」

この末期の大蚯蚓に何を重ねるか、それは読む人の自由だが、誰にとっても他人事ではない。生きるとは一年一年を墓標に刻むことである。次は苦い笑いを強いて、しかし誰をも思わず頷かせる。深く切ないユウモアの気配が、作者の存在の影を一段と濃いものにしている。

大きな収穫

三枝　昂之

伊藤一彦の『月の夜声』は彼の歌業をさらに一歩自在な世界に広げた成果として、選考委員全員の評価が一致した。

わが部屋に相談に行くをためらひて死にし者
なしや　半顔の見ゆ

牧水は死の床に友ねぎらひき「何なら一本つけ
させませうか」

前者の「半顔の見ゆ」には、自身の非力を見つめるカウンセラーとしての目があり、苦しくも誠実な説得力が心を打つ。後者は牧水研究家伊藤ならではの細かいデータを生かした歌。牧水のねぎらいは「なんならお相伴しましょうか」とつづく気配もあり、いかにも牧水らしい死の床。そこが楽しい。齋藤茂吉短歌文学賞にふさわしい収穫を喜びたい。

日常の中の非日常を

馬場　あき子

月光が照らし出す風景は「非日常の風景」だという言葉に触発され、太陽光でみるのではない風景として日常を見ようとしている。そこにはさまざまな場に真摯に生きようとする人間の姿や、意外なおかしさや、悲哀や、にがさをみることになる。歌の新鋭として登場した伊藤さんが刻んできた年輪は、すでにどんなことをも詠える技倆とともに、人が見ていながら見えていない、日常の中の非日常を抉り出す鋭く暖かな心眼をやしなってきた。その結実をその一冊に見ることができるだろう。

西行は何もて耐へし三日月の没りて輝きもたぬ長
夜を

雨に負け風に負けつつ生きてゐる柔らかき草ひと
を坐らす

第２１回　齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

伊藤　一彦　（いとう　かずひこ）

歌人。若山牧水記念文学館館長。

1943 年（昭和 18 年）、宮崎県生まれ。66 歳。

宮崎県宮崎市在住。早稲田大学第一文学部哲学科卒。

昭和 43 年「心の花」に入会。大学卒業後帰郷し、教員のかたわら作家活動を続ける。郷土の歌人若山牧水の研究者でもある。

歌　集：「海号の歌」、「新月の蜜」、「微笑の空」ほか

受賞歴：読売文学賞詩歌俳句賞、寺山修司短歌賞、迢空賞

受賞の言葉

伊藤　一彦

短歌の巨匠である齋藤茂吉の功績を記念する「齋藤茂吉短歌文学賞」をいただけることになり光栄に存じます。選考委員の四氏は私が日ごろ尊敬している方々であり、そのことも今回の受賞の大きな喜びです。数ある歌集の中から私の『月の夜声』を選んでくださった委員の皆様に心から御礼を申し上げます。

齋藤茂太著『茂吉の体臭』に〈父の一番の苦手は、生あたたかい南風の吹く日であった。そういう日は、さかんに、「具合がわるい」を連発した〉と記された箇所があります。私はそんな「生あたたかい南風の吹く日」の多い宮崎に住んでいます。そして、南に住んでいる人間の多くがそうであるように、北に対する憧れを持っています。では、「北」とは何か。その「北」の力と美を教えてくれた歌人が私にとっては齋藤茂吉であったし、今もそうです。その意味では最も憧れの歌人が茂吉です。

宮崎の生んだ歌人に若山牧水がいます。その牧水の「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅行く」など五首を引いて、齋藤茂吉が『明治大正短歌史』の中で「朗々として誦すべく、叙情味の豊かな不滅の作ばかりである」と評価し書いてくれていることも私には忘れがたいことです。

これまでの受賞者

第一回　岡井　隆『親和力』砂子屋書房
第二回　本林勝夫『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』桜楓社
第三回　塚本邦雄『黄金律』花曜社
第四回　前登志夫『鳥獣蟲魚』小澤書店
第五回　斎藤　史『秋天瑠璃』不識書院
第六回　近藤芳美『希求』砂子屋書房
第七回　小暮政次『暫紅新集』短歌新聞社
第八回　馬場あき子『飛種』短歌研究社
第九回　吉田　漱『「白き山」全注釈』短歌新聞社
第十回　佐佐木幸綱『呑牛』本阿弥書店
第十一回　伊藤　博『萬葉集釋注』集英社
第十二回　森岡　貞香『夏至』砂子屋書房
第十三回　竹山　広『竹山広全歌集』雁書館・ながらみ書房
第十四回　藤岡武雄『書簡にみる斎藤茂吉』短歌新聞社
第十五回　清水房雄『獨孤意尚吟』不識書院
第十六回　小池　光『滴滴集』短歌研究社
第十七回　三枝　昂之『昭和短歌の精神史』本阿弥書店
第十八回　花山多佳子『木香薔薇』砂子屋書房
第十九回　永田　和宏『後の日々』角川書店
第二十回　河野　裕子『母系』青磁社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇
山形市松波二丁目八―一　山形県生活環境部生活文化課内
TEL・〇二三―六三〇―二九〇三